国立大学法人
京都教育大学
KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

京都教育大学
教職キャリア高度化センター

「生きる力」を育てるためのキーワード集
文献案内

今回、「生きる力」を育てるためのキーワード集（その2）「続･『資質･能力』を考える」でご紹介した内容については、下記の文献なども参考になります。ご参照いただければ幸いです。

【資質・能力の三つの柱】

□田中耕治（編著）『資質・能力の育成と新しい学習評価』ぎょうせい、2020年。

これからの時代に求められる「資質・能力の三つの柱」の特徴をふまえた上で、その評価はどうあるべきかについて検討されています。とくに、2019年に改訂された指導要録にもとづく新しい「学習評価」の理念とともに、新三観点の評価のあり方が具体的に展望されています。また、近年の「学校における働き方改革」のなかでの評価活動の工夫についても論じられています。

なお、シリーズ本として、**田中耕治（編）『各教科等の学びと新しい学習評価』ぎょうせい、2020年**や**田中耕治（編）『評価と授業をつなぐ手法と実践』ぎょうせい、2020年**なども参考になります。

【メタ認知】

□ファデル, C.（著）岸学（監訳）『21世紀の学習者と教育の4つの次元―知識,スキル,人間性,そしてメタ学習』北大路書房、2016年。

今回の学習指導要領の「資質・能力の三つの柱」の原型となった四次元の教育について、その概念構築をしたC.ファデルの著書です。本書を見れば、グローバル化に向かう日本の教育の状況がよく把握できます。また、日本の「資質･能力の三つの柱」の「知識･技能」に「知識」、「思考力･判断力･表現力」に「スキル」、「学びに向かう力・人間性等」に「人間性」がそれぞれ対応しており、「メタ認知」はそれらを包含した概念として示されています。

【自己調整学習】

□自己調整学習研究会（編著）『自己調整学習：理論と実践の新たな展開へ』北大路書房、2012年。

「主体的な学び」、「自ら学ぶ力」と関わりが深いとされる自己調整学習について研究を深めてきた我が国の研究者による、包括的、体系的な論集です。第1部では、理論の概観や自己調整学習の要素とされる学習方略やメタ認知、動機付けなどが取り上げられ、第2部では、国語、算数・数学、理科、英語などの教育実践との関わりでの研究の成果の報告や提言がなされています。

なお、自己調整学習の提唱者の著作を直接読みたいという方には、**ジマーマン＆シャンク（編著）、塚野（監訳）『自己調整学習の理論』北大路書房、2006年**などがあります。

【主体的・対話的で深い学び】

□澤井陽介『［図解］授業づくりの設計図』東洋館出版社、2020年。

副題として、『「授業をつくるとはどういうことか？」澤井陽介の見方・考え方を構造化する！不易と流行の教育課題55』とあります。さまざまな教育課題を俯瞰しながら部分と全体の関係を捉えなおすことができるよう、「授業づくり」に特化し、構造図や構想図などによって説明されています。「主体的・対話的で深い学び」のみでなく、学習指導要領改訂に関わるキーワードの全体像や重点事項を大括りで掴みやすいのではないでしょうか。

なお、**教育課程研究会（編著）『アクティブ・ラーニングを考える』東洋館出版社、2016年**なども、学習指導要領改訂の考えや期待されていることが書かれており、参考になります。

【ICTの活用】

□A Personal Computer for Children of All Ages（英文）Alan Kay

https://www.mprove.de/visionreality/media/kay72.html

あらゆる年齢の「子供たち」のためのパーソナルコンピュータ（和訳）　アラン・ケイ著

https://swikis.ddo.jp/abee/74

この文献は、アメリカのコンピュータ科学者であり教育者でもあるアラン・ケイが、1972年に発表した数ページのエッセイです。アラン・ケイは、「パーソナルコンピュータの父」として知られている人物で、このエッセイで、発達心理学で著名なジャン・ピアジェの「操作モデル」を参考に子どもたちの学びを支援するコンピュータの理想像として「Dynabook（ダイナブック）」を提案し、40年を経た現在、タブレットやスマートフォン等によりこの提案は現実のものとなりました。ICTの活用を考えるうえで、原点ともいえる文献です。

【Society5.0に向けた教育】

□文部科学省「Society5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会『Society5.0に向けた人材育成 ～社会が変わる、学びが変わる～』（概要）（本文）」2018年。

Society5.0の社会像と求められる人材像や学びの在り方、取り組まれるべき政策の方向性、新たな時代に向けた学びの変革等について、これまでの議論を踏まえて論じられています。AI時代の人間の強み、共通して求められる力、新たな社会を牽引する人材、およびSociety5.0における学校（「学び」の時代）等、これからの教育や学校の在りようの方向性について述べられています。本文にある**『Society5.0に向けた学校ver.3.0』**も参考になります。

【社会に開かれた教育課程】

□貝ノ瀬滋（監修）稲井達也・伊東哲・吉田和夫（編著）『「社会に開かれた教育課程」を実現する学校づくり～具体化のためのテーマ別実践事例15～』学事出版、2018年。

第1部では「社会に開かれた教育課程」を進める学校づくりの概説について、これからの学校教育において多忙化する学校改革の視点、教育委員会との連携の在り方、またスクール・マネジメントの観点、実現する要としての学校図書館運営などが、これまでの経緯や社会情勢を踏まえて述べられています。第2部では「社会に開かれた教育課程」を進める学校づくりの実践事例について、「むすびつく地域社会」「健康長寿社会に向けて」「国際社会を視野に入れて」「環境とかかわる」「人とかかわり、自分を見つめる」「社会のしくみとつながる」の項に分けて、先進的な取組をしている全国各地の学校の具体的な事例を紹介しています。

国立大学法人
京都教育大学
KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

令和2（2020）年12月23日発行
【編集】京都教育大学 教職キャリア高度化センター
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地